

米国立公園の標識整備（入口標識を中心として）

環境省自然環境局生物多様性地球戦略企画室長補佐 鈴木 渉

米国立公園における入口標識

米国で国立公園を訪れた際、入口標識で写真を撮影された経験をお持ちの方も多いたのではないだろうか。私も、できるだけ車を停めて写真を撮ることにしている。国立公園の周辺には信号がないので、高速道路から公園の入口までノンストップで到達してしまうということも珍しくない。入口標識は公園の料金ゲートよりも手前に設置されていることが多く、標識の前にゆつたりとした路肩駐車スペースもある。その意味で、国立公園に入る前の貴重な小休止の場ともいえる。のんびりと三脚などを立てていると気分も落ち着いてきて、国立公園に到着したことを実感することができる。また、標識を過ぎると、そこから先はいつ珍しい動物やすばらしい風景に出会ってもおかしくない「特別な」

場所である。このため、カメラを準備したり靴を履きかえたりする好みのチャンスでもある。

ところで、標識の前で撮影した写真は不思議によく撮れていることが多い。風景が特段優れているような場所は意外に少ないのだが、標識のデザインやサイズ、看板の周囲のスペースなどが十分配慮されているためではないかと思う。さらに、表示面には国立公園局のロゴマークや公園の名称も入っているため、その写真がそのままアルバムやインデックスにもなる。

米国の国立公園における標識は単なる境界標識ではなく、公園のエントランス計画やイメージ戦略上重要な役割を果たす施設としての役割を果たしているようだ。本稿では、いくつかの国立公園局のマニュアルなどから、その役割や設計思想などについて、検討を試みたい。

国立公園における施設整備とCCC

国立公園の公園施設の基礎は、CCC (Civilian Conservation Corps: 民間人保全部隊) によって築かれたといわれている。CCCは、一九三三年にニューディール政策の一環として導入された雇用対策のひとつである。職にあぶれた多くの若者が、公園内に設営された軍隊式のキャンプに寝泊りしながら、施設整備に従事した。こうして、全国各地の国立公園において、それまで遅れていた道路、駐車場、建築物、歩道、標識などの整備が文字どおり「人海戦術」により進められた。

こうした大規模な公園整備の過程で、国立公園局とCCCは、施設計画やデザインの体系化をせまられることになった。このような要請から、施設整備の事例集として、「公園及びレクリエーション

施設 (Park and Recreation Structures)」が、一九三八年に取りまとめられている。

入口標識の起源

同書においては、多くの施設が写真とともに解説されている。入口標識は、主に「入口道路 (Entrance ways)」と「標識 (Signs)」の項で取り上げられている。

「入口道路」の項からは、当時、商業トラックの通過利用と、利用者によるスピードの出し過ぎが問題になっていたことが伺われる。国立公園に利用者をお誘いしながら、いかにして連邦政府所管地である国立公園の不適切な利用を抑制するか、という点についてさまざまな記述がある。その役割が標識などを含む構造物の設置にも求められた。

その対策の一つとして導入されたのが、土地の境界を明示すると

ともに、名称を掲示するパイロン (石積み塔柱) だった。また、ゲート (門) もアクセスを制限する施設として効果があったものの、通行量の多い公園の入口部分には不向きだったために、扉部分のついたものはほとんど導入されなかったというのだ。その代わりとして、ゲート両側の擁壁部分、アーチなどが公園入口に設置されることになった。

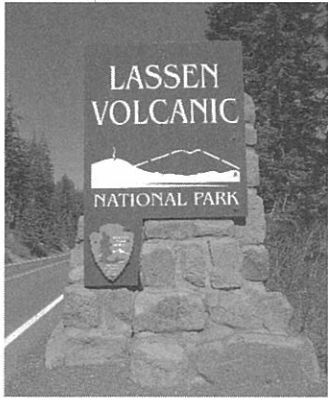


写真1 クレーターレイクの入口標識。石積み部分にパイロンの意匠を引継いでいる

こうして、公園の入口標識には、パイロンの名残として、多くの入口標識に石積みの意匠が取り入れられたり、ゲートの門柱やアーチ部分と思われる意匠が取り入れられたりしている (写真1、2)。

一方、純粹に標識として設計された入口標識もある。丸太を横たえたもの、一本支柱、二本支柱に腕木をつけたもの、二本支柱とサイン板、そして屋根つきのものなどがある。

一九八八年のサインマニユアル

後述する新しい基準が策定されるまで、国立公園内の標識類のマ

ニユアルとして用いられてきたのが国立公園局の「一九八八年のサインマニユアル」である。

このマニユアルでは、「国立公園の入口標識は、国立公園に独自のもの」と位置づけ、公園独自のデザインを認めている。その一方で、国立公園局の管理する「ナショナルパークシステム」全体が統一的なイメージを保つことができようという指針や考え方を示している。入口標識については、「ロゴマークと国立公園名のみを記載する」こととし、場合により「組織名を含めることができる」としている。記述を簡略化・統一化することにより、入口標識の機能を明確化し、あわせて国立公園共通のイメージを提供することがそのねらいである。また、材質は、それぞれの公園の性格をイメージさせ



写真2 グランドティートン国立公園の入口標識。ゲートの意匠を取り入れたと思われる木柱が配置されている

るものとすることを求めている。公園内で見られる岩石、木材を用い、そのサイズも、原生林のある公園であれば太い丸太を、そうでなければ細い木材を用いるべきであるとしている。

一九八八年マニユアルのもうひとつの特徴は、エントランス道路の設計速度や、道路の規模・幅員などに応じて、盤面の大きさ、高さ、文字の大きさなどを選択するための基準が示されたことである。

ハーバースフェリーセンター

ハーバースフェリーセンターは、国立公園局のデザインセンターとして一九七〇年に設立され、国立公園におけるビジターセンターの展示計画や展示のデザイン、

出版物の執筆・編集、図のデザイン・加工などを行っている。

例えば、その主な業務のひとつにパンフレットの制作がある。各国立公園のパフレットを一元的に制作・印刷することにより、グランドキャニオンなどの有名な国立公園から小さな歴史公園に至るまで、国立公園局が管理する公園地の印刷物について、一貫したイメージと高い質を維持している。なお、同センターの行う印刷物のデザインで特徴的なのは、「ユニグリッド・システム」という編集方式が導入されていることである。国立公園局のパフレットには、必ずその上端に黒い帯 (通称ブラックバンド) が入っているが、これは同システムによるものである (写真3)。基準となるグリッド (格子) を組み合わせることにより、編集に裁量を持たせながらも、紙面の構成に統一感を出すための手法だ。

その他、国立公園局は、職員のコニフォーム、組織のロゴマーク、印刷物のデザインなどを通して、「ナショナルパーク」「レンジャー」といったイメージを確立してきた。同局がこのために注いできた